様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月９日現在

機関番号：３３９２５
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２０６０５

研究課題名（和文）
外国語教員１０年目研修制度の研究と分析―教員免許更新制導入に向けて―

研究課題名（英文）
A Study and Analysis of an In-service Training Course for Teachers of a Foreign Language in their 10th Year of Teaching: In Preparation for the Introduction of the Teacher Certification Renewal System

研究代表者
木村　友保（KIMURA TOMOYASU）名古屋外国語大学・現代国際学部・教授
研究者番号：30329867

研究成果の概要（和文）：
本研究は英語教員の１０年目研修３年間が対象である。時事英語を教材として、電子メールによるライティング指導をした研修は効果があった。個別指導が可能だからである。
原文と最終原稿の量的分析をした結果、首尾一貫性が最も伸びた年がある。意見交換が最も活発な年であった。
「効果的な教員研修」とは参加するうちに「真剣に学んでいた」と気づくものである。忙しい教員に個別指導を可能にする電子メールによる指導を提案する。

研究成果の概要（英文）：
This study is based on a three-year teaching of an in-service training course for teachers of English. The teaching of writing by e-mail, using English news topics was found effective. This kind of teaching is conducted on a one-to-one basis.
A quantitative analysis of the original essays and their final drafts by each participant reveals one year of participants standing out in changes between the two essays. They were most active in exchanging ideas.
An effective teacher training makes its participants find themselves seriously studying. E-conferencing is recommended as an in-service training on a one-to-one basis for extremely busy teachers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	400,000	120,000	520,000
2010 年度	300,000	90,000	390,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
総　計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学、外国語教育
キーワード：外国語教育、教員研修、時事英語ライティング

１．研究開始当初の背景

報告者は過去１１年間、愛知県の教育委員会主催の教員研修制度に関り、特に過去９年間は１０年目経験者の研修講座を担当してきた。２００７年６月、日本の教育基本法が改正され、教員免許更新制度が２００９年４月より導入されることに決まった。同年９月に広島で参加した「教員免許更新制の課題と展望」というシンポジウム（第４６回大学英語教育学会全国大会）で、この制度が「１０年ごとに免許更新」、「大学等での約３０時間の講習受講」という特徴を有し、「自己研さんの習慣作りが目標」であることを知った。さらに２００８年９月に東京で参加した「教員免許更新制と英語教員の資質能力」（第４７回大学英語教育学会全国大会）では、現場の実情に即した柔軟な研修システムの構築のためには、英語教員の「英語力」と「授業力」の基準策定が求められていることがわかった。外国語教員の１０年目経験者研修を取り巻くこのような社会状況が、本研究を着想した理由である。

２．研究の目的

研修当日までの事前研修は約１カ月半ある。研修当日に行う英語スピーチの原稿づくりのために、電子メールによるライティング指導を実施している。英語スピーチのテーマ探しのために英語ニュースを書き取り、ライティング練習、エッセイ・ライティングが課せられているが、完成したスピーチ原稿（エッセイ・ライティング）の推敲過程で、メール交換による「授業」が実施される。この「授業」の全過程が記録されているので、この記録を分析することで報告者の「授業力」について検証できる。

生徒もしくは学生の書いた英語のライティング研究の中で、「審査員」としてよく登場するのが「教職経験１０年目のベテラン教師」である。しかし、何を基準に「英語ライティングのベテラン」とみなしているのだろうか。過去６年間そういう「ベテラン英語教師」の研修のお手伝いをしているが、すべての教師が必ずしも「ベテラン」とは言えない。その証拠を本研究では提出できる。そして２００９年から２０１１年までのデータに基づく実態調査となり、現場教員の「英語力」を検証することになる。

教員研修を主催する教育機関に直接尋ねても「効果的な教員研修」についての実像を把握することは難しい。そこで、実施した研修の受講生の中から本研究の趣旨に賛同してくれた教員の授業参観の実施、さらに同教員および同教員が属する学校の校長にインタビューを実施することである。そのようなインタビューの結果を一つずつまとめていくことで、「効果的な教員研修」のあり方について具体的な提言ができる。

３．研究の方法

本研究の対象となった公立高校の英語教員の１０年目研修は毎年７月に実施される。「公式の研修」は一日だけだが、それ以前の約１カ月半を事前研修に使っている。本研究で使われる資料はこの事前研修で得られた資料である。教育センターから送られる課題は、ＣＤと、各受講生が選ぶ６つのヘッドラインの書き取り用紙、ライティング練習用作文用紙と、最終的なエッセイ・ライティング用紙である。教育センターからは受講生の書き取った英語ニュースの記入されたもの、６つのトピックに関して、ライティング練習をしたもの、そして、最後に１つのトピックを選び、自分なりに最善の努力をして書かれた英語のエッセイが報告者に送られてくる。

次の資料は、事前研修の中で、電子メールで行われるライティング指導で得られるも

のである。最初のうちは、儀礼的な挨拶が多いが、徐々にエッセイの書き方に対する意見交換が報告者と研修の受講生との間に行われる。このやり取りをデータとして保管し、印刷する。

以上の資料を報告者が考えるライティングのベテラン教師（３０年以上、和文英訳の訓練をしてきた元高校教師、予備校講師、大学教員）に送付し、報告者の研修内容や、受講生の参加態度について意見を求めた。

かつて高校の研修に受講生として参加し、現在はライティングの研究者として大学で教鞭を取っている佐藤雄大氏にも同じ資料と、報告者の書き直し文、ネイティブ・スピーカーの書き直し文を送付し、量的分析を依頼した。また、かつて中学の研修に受講生として参加し、以前とは異なる学校だが、現在も中学で積極的に英語教育に従事しておられる山田久美子氏にも同じような資料を送付し、現場教師としての質的分析を依頼した。

さらに、かつての受講生が勤める中学２校、高校２校を訪問して、授業参観および校長に教員研修についてインタビューを実施した。その中で「効果的な教員研修」について考えることにした。

４．研究成果

公立高校の英語教員の現職教育１０年目研修に９年間関わった。本研究はその最後の３年間が対象である。その教員を対象にした「公式の研修」は夏季の一日であったが、事前指導を電子メールによって約１カ月半実施した。本研究は、その事前指導で報告者が行った指導の「授業力」を検証すること、指導中に得た資料をもとに参加した受講生（高校教員）の「英語力」を検証すること、そして最後に「効果的な教員研修」のあり方を考えることを目的とした。

時事英語を教材としたライティング指導で展開した授業はある程度効果的であったと言える。受講者数が何人であろうと完全に個別指導ができたからである。受講生が書いた英作文に対し、講師（報告者）はまずは内容について、第一回目の修正文に対しては英語について、そして第二回目の修正文については受講生の修正の在り方についてコメントをした。さらに講師（報告者）はコメントで言い尽くせない点は、受講生の書いた英作文をもとに「自分ならどういう英文を書くか」という観点から「修正文」を提供した。さらに、ネイティブ・スピーカーにも「修正文」を提供してもらった。このような指導の下で、すべての受講生が熱心に反応してくれた。

「義務ではない」事前指導に受講生全員が最後まで参加してくれた。研修後のフィードバックでも全員が高く評価をしてくれた。さらに受講生が自分で書いた英文（修正文も含む）を報告者が本研究のために使用することを許可してくれた。以上の事実で、報告者の「授業」はある程度は「効果があった」と判断することができる。ただし、今回の研究ではそれぞれの受講生にどんな効果を与えたかは正確には測定できなかった。さらに、報告者の指導過程を細かく検証したあるライティングのベテラン教師は、「原文が最もよく書けており、一回目の修正文ではむしろ、改悪文となってしまい、最後の修正文では可もなく不可もなしという文章になってしまった」という手厳しい指摘を残している。教員の援助がいつも改善につながるとは限らないということである。大いに注意しなければいけない。

次に、受講生の「英語力」を検証した。ただし、今回の研究では「ライティング力」に限定した。生徒や学生が書いたライティング

の評価者に１０年以上の教育経験を持つ日本人英語教員が「ベテラン教師」と選ばれることがあるが、本研究ですべての１０年目教員が「ベテラン教師」とは言えないことが判明した。むしろ、書く内容に関してよく考える教員かどうかが決め手となる。佐藤氏の量的分析で、２００９年度の研修の受講生がグループとして「首尾一貫性」という尺度では最も高い改善度を示していたが、電子メールでの意見交換でも一番活発な受講生たちであったことを思い起こす。

最後に、「効果的な教員研修」とは最初から出来上がっているものがあるわけではなく、「研修」と呼ばれるものに参加していくうちに「自分が真剣に学んでいた」と気づくことがあるようだ。この結論は、２０１１年７月でもって報告者が公立学校の現職教育との関わりが終了し、また受講生を送ってくれた学校の校長先生とのインタビューや、報告者のかつての受講生であり、本研究では研究協力者となってくれた佐藤雄大氏、山田久美子氏とのインタビューを実施する中で改めて確認できたものである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 木村友保、副教材としてのＮＨＫ英語ニュースの有効性--英語教員の現職教育を中心に --, Media, English and Communication (A Journal of the Japan Association for Media English Studies), 査読有, No.1, 2011, 105-118

② Tomoyasu Kimura, Paul Kei Matsuda, Jun Oshima, Takehiro Sato, Collaboration in Writing Education, The JACET International proceedings, 査読無, 2011, 173-180

〔学会発表〕（計３件）

① 木村友保、時事英語によるライティング、指導の中のフィードバックの意義について--英語教員の現職教育を中心に--、日本メディア英語学会、２０１１年１０月２３日、京都産業大学

② Tomoyasu Kimura, Paul Kei Matsuda, Jun Oshima, Takehiro Sato, Collaboration in Writing Education, The JACET 50th Commemorative International Convention, September 1, 2011, Seinan Gakuin University, Kyushu

③ 木村友保、副教材としてのＮＨＫ英語ニュースの有効性--英語教員の現職教育を中心に--、２０１０年１０月３日、東海大学

〔図書〕（計１件）

木村友保、他、大修館書店、英語教育学大系第１０巻『リーディングとライティングの理論と実践―英語を主体的に「読む」・「書く」、２０１０年、１８７－１９７

６．研究組織

(1)研究代表者

木村　友保（KIMURA　TOMOYASU）

名古屋外国語大学・現代国際学部・教授

研究者番号：３０３２９８６７

(2)研究協力者

佐藤　雄大（SATO　TAKEHIRO）

名古屋大学・教養教育院・助教

研究者番号：２０５４７０３８

山田　久美子（YAMADA　KUMIKO）

新城市立鳳来中学校・教諭